

西洋の時間感覚は直線的であり、東洋の時間感覚は循環的であると言われる。この時間感覚はそれぞれの文化の世界観、宗教観に準拠する。キリスト教的の世界観は、天地創造に始まり最後の審判に終わる、始点と終点が明確な直線である。またこの直線は一定の速度で進行するもので、一定間隔で等分することが可能である。機械時計が普及して以降の西洋で、定時法が一般化した（資料二）のも当然である。時間は誰にとってもどんな場合でも一定の速度で進行することは、一神教、すなわちひとつの法則が世界をあまねく照らしていると考えるキリスト教徒にとっては、疑いの余地もないことだった。だからこそ幕末の日本を訪れた西洋人は、日本人の時間観に戸惑いを抱いた。

一方仏教的世界観は、輪廻転生の発想にもとづく循環的なものだ。そのベースにあるのは「作付けから収穫までを一年とするサイクル」（資料四）を持つ農耕文化である。木々は一年のサイクルで花を咲かせ、実をつける。同様に「常世の国」に旅立った先祖の魂も、年に二度は「村へ戻つて来る」。またこの一年のサイクルの中の時間の進行も一定ではない。不定時法においては、昼間の時間の進み方と夜間の時間の進み方は異なる。季節によって時間の長さも変わる。このような感覚が当たり前だったところに、西洋的な時間規律が一方的に「正しい」ものと

して持ち込まれた。そしてこの時間規律が、現代に至るまで日本人の行動や考え方を規定している。

だがその西洋的時間感覚は本当に、誰にとってもどんな場合でも「正しい」と言えるのか。そこに疑問を投げかけたのが資料一である。西洋的時間感覚は直線的であり、一定間隔で進行し、等分することが可能とされるが、等分しているのは神ならぬ人間である。一定間隔とされているものの基準は、本当は一定でないかもしれない。相対性理論を初めとした二十世紀における諸発見も、この西洋的時間感覚に相対化を迫った。

しかし相対性理論の発見から百年がたっても、現代人の時間規律は変わらない。どころか、ますます時間の節約や時間厳守が求められるようになっていくのではないかと人々の視野は狭く短期的になっていくのではないかとという危惧もある。それは東洋的な時間感覚を取り入れるべきかといえば、現代社会において不定時法のような基準をそのまま用いるのも困難である。また資料二で示された「長い今」というプロジェクトも、西洋的発想だ。一定間隔で時を刻み続けるという発想はそのまま、稼働時間をのばしただけにすぎないものが、本当に人間の視野を広げることになるのか疑問である。むしろ生まれ死に、同じことを繰り返し続ける循環的なシステムこそが、長期的な持続可能性を探るために必要ではないだろうか。

資料番号………資料一、資料二、資料四

解答例

題（タイトル）：時間と感覚を共有する「私たち」の中で「文化」が生まれる

資料四では、折口が大正時代の沖縄での生活を「歴史がなかった」と評したことが紹介されている。これは、作付けから収穫までを一年とする循環的な時間意識によるものだという。折口は、その意識が「ヤマトの古代」における原初的な時間意識と等質だと考えていた。さらには、後になって一年を中元の時期を境に二分し（両分制）、六月と十二月の晦日の大祓のように季節に応じて同様の行事が繰り返されるようになったと指摘している。

一方、資料二によれば、明治のお雇い外国人技術者のほとんどが、共通して日本人の時間感覚、その悠長さに悩まされていた。日本人の職人たちは時間を守らず、「まるで時計の時間とは無関係に物事が進行する」仕事ぶりだったという。その背景には「不定時法」で時間を計っていた江戸時代までの生活がある。不定時法は、昼間の時間と夜間の時間を六等分して表すものだが、したがって、そこで計られる「二時間」は季節によって異なり、明治のお雇い外国人技術者、また現代の私たちが従っている時計で計られる「二時間」とは一致しない。随分と不正確な時間表示法だが、これが江戸時代までの日本人の生活では「感覚」に合っていたのだと私は考える。

資料四の時間感覚に照らしてみれば、この「不定時法」の主な関心は昼間と夜間の「循環」にあるのではないだろうか。陽が昇って、そして沈む、その繰り返しで一年を構成する。そして、その循環が城下町や村の域内で生活する人々の間ではきちんと共有されていた。同じときに日昇と日没を見て、同じお寺の鐘を聞き、「今何時」かの答えが共通する、その範囲が同じ時間感覚を持つ「私たち」として区分されていたのだろう。この「私たち」の域内で問題が生じない限りは、日本人はのんびり、悠長な時間感覚を持ち続けることができた。

そして、このように時間や空間を共有し、そしてそこから何かを捉える「感覚」が共通するところに芽生えるものをそのコミュニティにおける「文化」と呼ぶことができるのではないだろうか。たとえば、資料五で述べられている子供たちの様子を見てみよう。最初は本人の状態や環境のために問題行動が目立ち、「私たち」に入れないのだろう子供たちが各々にノイズを発している。しかし、他のメンバーと同じ時間と空間において、お互いに声が届くような距離で過ごしている中で、彼らのリズムは調和し始める。そしてクラス全体が「一つのメロディー」を奏でているかのような場となった。現代の高度な情報通信技術を以ってすれば、時間的、また空間的な隔たりは問題とならず、非常に広い範囲で「私たち」を維持できるかのように思われている。資料二のいう「現代の日本人」の多くはそう信じているだろう。しかし、「私たち」が現実と同じ場で共にいることで、よりよく何かを生み出せるのではないか。

資料番号：資料二、資料四、資料五

題（タイトル）：現代人が経験する新しい時間世界

資料三によると、たとえ同じ空間を生きていても、私たちは年齢によって異なる時間を生きていくという。つまり、電車で隣り合わせた小学生やお年寄りとは私は、同じ時間を経験していない。それどころか、六歳の私と十八歳の私と八十歳の私では、全く異なる時間を生きていく。この点に私は、奇妙な感覚を抱いた。その奇妙さは単に人間が等間隔の時間を生きていかなかったということではない。全く異なるリズムを刻む大勢の人間が、同じ時間の尺度で平然と生きていくこと、しかもそれに疑いを持つことなく生きてきたことに、奇妙さを覚えたのだ。

それでは、私たちの外にある、尺度としての時間が刻むリズムは一定なのだろうか。実感としては、正確な電波時計やスマホ時計を基準に、私は社会生活を送っている。ところが資料一によると、その信頼も疑わしくなる。一定間隔とは絶対的なものではなく、「何かを一定だと仮定したとき、他の現象が一定であるとか、ないとかを論ずることができる」（資料一）にすぎない。それにもかかわらず、現代日本では、日本標準時で手持ちの時計や体内時計を矯正し、時間厳守で生活している。

この尺度は、日本国内に遍く通用している。北海道は広島と比べて日はやく暮れるが、国民の行動は、一律の時間で規制される。貨幣、言語、法と同様に時間もまた、権力がコントロ

ールし、国家を国家たらしめ、国民が従うべき規範だ。つまり、現代日本における尺度としての時間を「一定だと仮定」し、尺度たらしめているのは、国家権力である。近代以前はヨーロッパでも日本でも、権力が時計を管理し支配してきたことが、それぞれ資料一、資料二からうかがえる。しかし近代以前の時間がゆるやかに伸び縮みする「不正確」なものであったのに比べて、近代国家成立以後、時間は物理的距離を超え、国土を均質な時間で支配するようになった。その結果、「時間の節約」や「時間厳守」が徹底されるようになり（資料二）、ついに現代人は、「近視的」だが近未来のために、今を生きるようになった。例えば、将来の就職のためには望む大学で学ぶ必要がある、その入学試験を突破するための受験勉強は、とりあえず自分が本当に学びたいことをいったん脇におくことでしか取り組めない。○年後という具体的な将来時間を見越して、そこから逆算した今を生きる生活を当たり前とするようになった結果、「時は金なり」という効率主義（資料二）に従うしかなかった。

ところが、デジタル空間が世界中を覆い尽くすようになった現在、国家による時間世界は相対化されつつある。たとえばオンラインゲームやアバターが活躍する仮想世界、VRの世界や配信番組の席巻は、もはや、国家が強制する時間の規範が支配的ではなくなり始めたことを意味するだろう。幸か不幸か、一万年時計（資料二）など作らずとも、私たちは、現実とは異なる位相で成立した時間世界を生き始めたのである。

資料番号：資料一、資料二、資料三

題（タイトル）：あるべき姿の基準は一つではない

大人になると子供の頃より一年が短く感じる。大人になるにつれてタンパク質の新陳代謝速度が落ち、体内時計が徐々に遅くなるのに対して物理的時間が一定であるため、感じる時間に対して物理的時間が短くなるからだと言料三は述べている。新陳代謝速度には個人差があるわけだから、この考えに従うなら子ども同士であっても、代謝速度によって時間の感じ方は変わることになるだろう。一方で学校生活は多くの場合、時計が刻む一定のテンポに合わせて進んでいく。資料五で筆者は「一番大変なクラス」と紹介された学級の授業を見学している。筆者は見学した状況について、それぞれの子供が持つリズムがクラス全体としてはカオスあるいは文字通りのノイズとなると述べている。あるクラスを「一番大変」と判断したり、ある状況をカオスやノイズと判断したりすることは、そもそも正当性をもつ評価なのだろうか。

何かを測るためには基準が必要だ。例えば時計が正確に一定の間隔を刻んでいるかを判断する場合には、判断される時計とは別の何かを基準にする必要がある。しかし、資料一であげられる基準はどれも、正確に一定の間隔を刻むものとは言い難い。ガリレイが振子の等時性を発見したとき、時間を測る基準としたとされる脈拍は常に一定とはいえない。それでも振子の等時

性が発見できたのは、振子運動にかかる時間を測るための基準として一定間隔を刻むと仮定されることで十分だったからである。振子の等時性は他の手段で振子が動く時間間隔を測ったとしても発見され得ただろう。

授業風景に調和があるかを判断する基準は、授業を評価するために測る基準として機能すれば十分であり、唯一の基準を求める必要はないのではないかと。授業風景や生徒の評価結果は、基準をどこに置くかによって大きく異なるだろう。ある基準のもとでは見出すことができなかつた善さが、基準を変えることでみえてくることもある。他のクラスの状況と比較して一番大変かどうかを判断し、特定の理想像のもとで授業の在り方を判断したのでは評価しきれない善さもあるだろう。担任や副担任が生徒らの語りを聴き取り、そうした関係を重ねることで授業風景に変化が生まれたと言料五は述べている。一人ひとりの語りに耳を傾けることで、教室が生徒の居場所になったことは変化の一因であろう。一人ひとりがそれぞれ異なる仕方の一つの時間を共有することをポリリズムと評価できるようになったのは、授業設計の違いも大きく影響しているだろう。語りと傾聴を通じて、生徒それぞれを基準とすることで彼らの善さを引き出すことができたのだ。

資料番号：資料一、資料三、資料五